

# 教育臨床心理学 練習問題と解答 by S. W. R.

## 練習問題 1

精神分析的発達理論とはどのような理論か説明せよ。

## 練習問題 2

乳幼児虐待の問題点をアタッチメント理論から説明せよ。

## 練習問題 3

電車の中で、母親におんぶされた赤ん坊が、じっとこちらの方を見ていたことについて生物学的な観点から述べよ。

## 練習問題 4

アダルトチルドレンと児童虐待について述べよ。

## 練習問題 5

「ガンは心身症である」ということは正しいか。これについて述べよ。

## 練習問題 6

摂食障害の歴史的・社会的背景について論述せよ。

## 練習問題 7

多重人格を心理的な適応という観点から述べよ。

## 練習問題 8

神経性食欲不振症と神経性過食症の類似点と相違点について説明せよ。

## 解答1

精神分析的発達理論とは、精神的エネルギーであるリビドーを想定し、その発達過程において現れる身体的特徴を、それが身体の中のどの部位に現れるかによって「口唇期」「肛門期」「エディプス期」「潜伏期」「性器期」の5つに分け分析する理論である。この理論では、エディプス期までの幼児体験がその後の性格形成に大きな影響を及ぼすとした。(具体的な影響については、教科書、プリント参照)

## 解答2

アタッチメント理論とは、乳児の信号行動と接近行動に分類される愛着行動と、それに対する母親の応答によって形成される「アタッチメント」が子供の性格形成に影響を及ぼすというものである。乳幼児の時期に虐待を受けた子供は、アタッチメントが適切に形成されていないため、将来の性格形成に問題が生じる可能性がある。具体的には、他人への信頼感の喪失、消極的な性格になる、などということが推測できる。

## 解答3

鳥類には、就巢性、離巢性という分類がある。就巢性の動物は、妊娠期間が短く、自力移動ができないという特徴があり、離巢性の動物は、妊娠期間が長く、自力移動が可能だという特徴がある。人間は、基本的には離巢性の動物の特徴を持っているが、「生理的早産」であるために、自力移動の点のみでは就巢性の特徴を持っている。自力移動ができないという欠点の克服のため、人間が身に付けた能力が大人とのコミュニケーション能力である。この能力を身につけることで、微笑みなどを通じて親の養育行動を促進し、自らの生存可能性を高めることができる。向の電車の乳児は、微笑みの中でも、生後三カ月程度の乳児に見られる、人間の顔に微笑む「三か月微笑」を行っていると考えられ、これによりみずからの生存可能性高めようとしていたのだと考えることができる。

## 解答4

アダルトチルドレンと児童虐待には強い相互関係があり、児童虐待がアダルトチルドレンを生み、アダルトチルドレンが児童虐待をするという世代間連鎖が生じる。アダルトチルドレンとは、身体的虐待を受けてきた子供の中で、子供に対する大人の思い、要求といったものを常に先取りして行動したり、自分の行動を大人の顔色をうかがい決定するといった、子供の本来の特徴である自己の欲求に誠実、大人を頼るといった性質を持たないいわゆる「小さな大人」のことを言う。このようなアダルトチルドレンは、人間関係に多くの障害を持っており、自らの将来性に期待を持たず、自尊心が低い。また、自己コントロール能力が低いという特徴がある。この自己コントロール能力の低さから、困難に直面すると暴力にはしる傾向があり、それが子供に向けられれば、児童虐待となる。

## 解答5

心身症とは心が原因になって起こる身体の病気のことである。確かに、精神的なものが原因の一つになることはある。例えば、ストレスによって免疫が低下し、NK細胞の働きが不活性となるという点がある。これは、「ストレスをためこむ、怒りを極端に抑制する」といった性格の人がガンになりやすいという実験結果からもうかがえる。しかし、ガンになるには、その他にも遺伝性、食生活などの様々な要因があることを考えて、ガンは心身症であると一概にはいえず、「心身症である側面も持つ」と考えることができる。

## 解答6

摂食障害は古くからある病気ではなく、社会の発達とともに出現した病気である。歴史的な背景としては、“やせていることが美しい”という考えの出現がある。古代は、食料が十分にはなく、食物に不自由しないことが、すなわち、太っていることが富裕層の証であった。しかし、食料が十分にいきわたると、こんどは量より質を求め、同時に痩せた体型が富裕層、上流階級の証となった。さらに、社会的な背景として「やせていることは自己コントロールができることの証」とみられた点がある。やせていると、食欲という自らの欲望をコントロールできていると考えられたのである。また、「女性の社会進出」も摂食障害の一般化の要因となった。それまで男性中心であった社会に女性が進出してくると、女性は社会で必要とされる有能な、すなわちスリムな体型を目指し

たのである。このような背景で摂食障害は増加しているので、摂食障害は先進国で多く見られ、発展国では稀な病気である。

## 解答 7

多重人格は、強い恐怖体験、または慢性的なストレスなどが原因となり、二つ以上の人格を自らの中に形成するものである。これは、一つはストレスを受けている時、また、恐怖を思い出しそうになった時、別人格になれば、その時の経験は別の人間が受けたものであるから、自分にはその経験はない。そのようにして、心の不安定を防ぐことができる。

それは、様々な環境に対して適切な人格を形成し、その環境に適応しているとも見ることができる。すなわち、多重人格とは、不適応ではなく、適応の結果なのだと言える。

## 解答 8

まず、類似点として、“肥満恐怖とやせ願望”があげられる。すなわち、自らが太っている、評価の低い人間であると考え、痩せることで自己評価が上げられると考えている。また、痩せが美しいと考える社会の出現と同時に出現し、それ以前はほとんどなく稀であったという類似点もある。

相違点としては、自己コントロールの強弱のちがいがある。神経性食欲不振症、すなわち拒食症の人たちは厳しい食事制限、運動を自らに課し、しかもそれをきっちりこなしている。一方、神経性過食症、すなわち過食症の人は、自己コントロールが上手くできないため、食べるときに食べるのを止められない、いわゆる無茶食いをしてしまうという相違点がある。